

「鎮魂」語

－「鎮魂」語疑義考 その2－

坂本 要[※]

この論考は前号(25号)に掲載した「『鎮魂』語疑義考 その1」の続きである。前号で明治以降に「鎮魂」という語がどのように使用されたかを述べた。鎮魂の意味には新嘗祭・大嘗祭に宮中で行われる鎮魂祭・近代古神道の鎮魂行法・クラシック音楽の鎮魂曲・死者供養の鎮魂の4つをあげた。死者供養の意味の鎮魂は日清戦争まで使われていたが日露戦争以降使用されなくなり、1970年以降急激に増えることを指摘した。日露戦争以降使われなくなる理由は、靖国神社の国家関与の強まりと天皇祭祀である宮中鎮魂祭との混同を避けたためであろうとした。靖国神社は戦死者を怨霊と扱うことを嫌い、怨霊鎮魂ではなく英霊の招魂・慰霊の語を使った。鎮魂という語が1970年以降に増加するのは靖国神社信奉の相対化や天皇祭祀言及の開放化とともに、カウンターカルチャーといわれる、反近代的非合理的な事象への関心の高まりを述べた。この期より情念・怨念・怨霊・鎮魂という語が多用される。

学問の分野でも宮中鎮魂祭と死者鎮魂の異同があり、鎮魂の語の使用についても「その1」で述べたと同じ様なことがいえる。研究史でも鎮魂を冠した論文が70年以降の使用は急に増える。ただし理由は社会的背景の影響とばかりに帰することはできない。鎮魂そのものの意味の曖昧さもある。幕末からの鎮魂の考証や研究を整理しながら問題点を探っていこう。

1、国学者の考証

古代日本の研究や考証は国学から始まったといえる。国学の特徴は古代の神観念を神々の体系として世界観的に図示化しようとした。記紀や万葉集にあらわれた靈魂観・死生観を対象としたが、その中に大嘗祭等で行われた鎮魂祭の儀礼なども含んでいる。

鎮魂の語は賀茂真淵『祝詞考』本居宣長『大祓詞後釈』の中にあり、「鎮御魂齋戸祭(おほみたましずめいんべのみまつり)」の祝詞から宮中鎮魂祭を考証している。国学者にとって、第一は祝詞に残っている鎮魂祭である。鎮御魂齋戸祭とは毎年の11月の鎮魂祭に結び留めた天皇の御霊を12月吉日に神祇官の齋戸殿に納める儀で齋戸祭(いわいどのまつり)という。具体的には天皇中宮東宮三方の御魂代の御衣と木綿の御魂緒を入れた御魂篋を齋戸殿に遷す儀で、11月の鎮魂祭は祝詞を奏しないので、賀茂真淵・本居宣長も鎮魂祭の考証はこの祝詞の解釈から始めている。祝詞本文は「御霊(みたま)を齋戸(いわいど)に鎮(しず)むる祭」とあり最後尾は「今年の十二月の某の日に齋(いわ)い鎮(しず)め奉(まつ)らくと申(まを)す」とある。

※筑波学院大学経営情報学部教授

このことを論じた飯田勇によれば鎮魂の鎮は神の鎮座を表す。斎戸の八神が天皇からの祭りを受けて斎（いわ）い鎮まることとしている。（注1）

次にこの鎮魂を詳しく考証したのは伴信友（1773～1846）である。平田篤胤（1776～1843）とは3年違いのうまれで、兩人とも本居宣長の入門を志すが意にかなわず、没後門人となっている。篤胤としては当初親交を結んだが、学風の違いから袂を分かつことになる。伴信友が徹底した考証を目指したのに対し、平田篤胤は洋学や仏教・民間伝承などを駆使して厳密さよりも発想の広さで学を築いた。伴信友は晩年73歳で『鎮魂伝』を書く。平田篤胤と親交があり、霊魂にもともと興味をもったからとされるが（注2）、ここで扱ったのは宮中鎮魂儀礼の考証で宮中鎮魂を天岩屋戸神話にもとめず、『旧事本記』記載の物部流の鎮魂法に結びつけた。以降の鎮魂の文献研究の基礎を示したとされるが、タマフリ・タマシズメの矛盾については触れていない。（注3）また『比古婆衣』十の巻に「遊部」の項があり史料が列挙されている。その引用に「鎮凶癘魂之氏」の語があり、「死者の魂の癘暴ぶるをいへるにて其暴を和平め鎮むる方を知れる氏の人なる由」とある。天皇の殯に関する史料であるが、このことも後の鎮魂論の基礎史料となる。

この鎮魂の儀礼的意味に踏み込んだ国学者に鈴木重胤（1812～1863）がいる。鈴木重胤は平田篤胤に追隨した幕末の国学者であり、間引き禁止を説いた『世継草』で知られている。（注4）鎮魂論の儀礼解釈で後の折口信夫に影響を与えたとされる。（注5）その解釈とは宮中鎮魂祭はオフミタマノフリマツリと読み「此フリフユは離遊べる運魂（ミタマ）の天中を行歴るが、人体の中府に降（フ）りて其触るる魂を殖し整える由なり」というものである。鎮魂とは天皇が外来魂を招き入れることの意味で、タマフリのフリは振る・降る・触れる・増やすに通ずるとする。これは折口信夫の鎮魂説につながるもので、影響が指摘されている。

このように国学者の鎮魂論は宮中鎮魂祭についての解釈で考証が進められる。これは天皇霊の話で、個人霊において魂を鎮める・霊を鎮めるということに目が向いていたのだろうか。

国学者が諸々の神と靈魂観をあわせて世界観もしくはコスモロジーとして図示して提示している。本居宣長の『天地図』平田篤胤の『靈（たま）の真柱（みはしら）』鈴木重胤の『古始太元図説』岡熊臣の『千世乃住處』などが挙げられる。本居宣長が世界を「顕事」と「幽事」に分け、顕事を現世、神々の世界を幽事としこれをアラハゴト・カミゴトと読んだ。平田篤胤は幽事を幽冥界としてカクリヨ即ち死後の世界とした。平田篤胤はこの幽冥界の解明に力を注いだといえる。本居宣長の『古事記伝』十四之卷大国主国避の段に「(大国主の) アガスマカは此の国に留めたまふ御魂の鎮坐（しずまりまさ）む處を云うなり。」とある（注6）。大国主のいるところはカミゴトをシラシメスところで御魂がシズマリマサム所としている。幽界は御魂がシズマルところとしている。平田篤胤になると幽界・幽冥界は死後の国ということを用いるが、『靈の真柱』下つ巻で「墓所に葬（かく）すも鎮（しず）まり坐す」の語がでてくる（注7）。墓所は鎮まるどころという観念である。篤胤の文に「靈の行方の安定を」とあり、「安定」に「しずまり」の振り仮名をふっているが、死後の世界を魂の「鎮まる」理想的世界としたのはこ

の期の国学者たちの共通した感覚である（注8）。幽界を魂一般の鎮まる所とした。ただここに悪霊を鎮めるという意味での鎮魂という使い方はされていない。（注9）

それでは悪霊・怨霊・御霊の鎮魂ということについてはどうであろうか。幕末国学の御霊論については小松和彦・宮城公子の論があるので、それを紹介する。（注10）宮城論文は平田篤胤の『玉禊』『玉禊総論追加』六人部是香（むとべよしか）の『顕幽順考論』中瑞雲斎の『窓廼独許登（まどのひとりごと）』を題材に御霊信仰といわれるものの国学者の対応を論じたものである。平田篤胤は資料を集めたが体系化されなかった。六人部是香は幽冥界をさらに審判して神位界と凶徒界に分け怨霊は凶徒界に位置づけた。中瑞雲斎は四国にある崇徳天皇の神霊を京都に遷座することを提言した。いずれも怨霊の鎮魂による御霊化を示唆したところで論は終わる。このことは小松和彦の近代天皇制が怨霊からその崇り性を奪い取ることによって成立するという考えにつながる。まさにこれが招魂社・靖国神社の成立になって行くわけで、それゆえに筆者が「鎮魂」語の近代で述べたように鎮魂の語は使用されなくなってしまう（注11）。

2、折口信夫の語義の展開

折口信夫の鎮魂論は前に述べたように鈴木重胤の延長にあるといわれる。しかし鎮魂に関連した論述を年代で追っていくと微妙に変化しているのがわかる。折口にとっての鎮魂という概念は大嘗祭をめぐる天皇論・古代葬制の殯論・鎮魂の芸能論さらにその基礎となるマレビト論・常世論と並んで折口学の根幹をなすものである。それだけに初期には細心に、後期には大胆に展開された論である。折口の鎮魂論は大嘗祭論の基礎としているだけに、論の可否をめぐる関連の論考は膨大になっている。ここでは折口の宮中鎮魂と死者鎮魂との対比を中心に限定して述べたい。（注12）

津城寛文が『折口信夫の鎮魂論』の冒頭に折口の鎮魂論が理解しにくいのは「鎮魂という語で普通我々が連想する＜死者のためのミサ曲（鎮魂曲）＞という語感がないからである」と述べている。鎮魂は死者の儀礼ではなく、天皇霊の再生儀礼であるからである。渡辺勝義は『鎮魂祭の研究』の「古代の鎮魂祭」のところで、鎮魂祭は公的共同祭祀であって天皇個人の病氣治療な個人利益の祭祀ではないとしている。しかし折口信夫の鎮魂論は宮中鎮魂論から天皇の葬送儀礼である殯を鎮魂儀礼ととらえたり、民間の神楽や盆を鎮魂儀礼ととらえる等のようにどんどんと拡大して折口学の根幹をなしてしまう。そのことをもう少し詳しくみていこう。

折口の鎮魂論は外部の魂を天皇に付着させる（これをタマフル＝魂触れると言う）、それを固める（これをタマシズメ＝鎮魂）という説に立つ。最近の説では外部の魂とは沖縄で言うセジ、人類学でいうマナに範をとったとされる（注13）。鎮魂のことは大正15年（1925）の「小栗外伝」の「魂の行きふり」という章で詳しく語られる。（注14）小栗判官の遊離魂の話から宮中の鎮魂祭の話が9ページも続く。タマフリが魂の蘇生に通じているという話である。次に昭和2年（1927）6月「ほうとする話」昭和3年（1928）1月「翁の発生」昭和3年（1928）10月「村々の祭り」の中で「鎮魂の神遊び」「冬の鎮魂」「山姥の鎮魂」というような村々の神楽舞・芸能

の説明に使用される（注15）。これらはのちに芸能史の諸著にも説明されるが、折口の頭の中にはこの期にすでに神楽鎮魂論はあったといえる。この昭和3年（1928）は折口にとっては画期的な論文を出した年で、6月には「大嘗祭の本義」が発表される（注16）。この大作を完成するのに「小栗外伝」より2年をかけ、11月には昭和天皇の大嘗祭が行われている。内容はニエの話から始まり五節の舞にいたるまで宮中の鎮魂祭と大嘗祭のことに尽くしている。

昭和6年に「原始信仰」という論を書いている。第一章の「たましひ」の項だけだがタマフリの説明で「鎮魂を悪霊を押へる為の行事と考えるようになったのは後代に於ける意義の変化である。」として鎮魂が怨霊鎮めではないことを言っている。

昭和8年長野県の下伊那神職会での講演記録が新『全集』の別巻1に「神道と民俗学」として載り刊行されている（注17）。ここに「第四章靈魂信仰五鎮魂の二義」「第五章神遊及び葬式」がある。「鎮魂の二義」はタマフリ・タマシズメの説明で「大嘗祭の本義」の延長である。「第五章神遊及び葬式」の項は「一 アソビの意義」「二 神楽」で「アソビ」とは舞うことで魂をふやすことであるから鎮魂であると説明する。宮中鎮魂祭の東遊び他の神遊び、および岩清水八幡の神楽をはじめ地方地方の神楽は鎮魂であるとしている。「ほうとする話」「村々の祭り」で言葉だけで出てきたことを説明したもので、宮中の鎮魂の儀礼のみでなくて演じられる芸能や12月に舞われる地方の神楽や冬祭りも鎮魂儀礼であるとする。鎮魂の範囲がひろげられたわけだが、この場合も個人霊の鎮魂でなく、神への鎮魂（タマフリ）といえよう。

続く「四 神道における葬式」「五 招魂」では天宇受売命の神楽は復活の鎮魂術の説明で、葬式の魂呼びも同じであり、殯も死んだ人を黄泉の国から帰す鎮魂であるとしている。いまままで鎮魂が個人霊を呼び戻す儀礼であるとはしなかったが、ここで鎮魂観念の新たな展開がなされる。この場合の鎮魂は魂を元気付ける意味と思われる。ただ説明は不十分である。この講演の翌昭和9年（1934）「上代葬儀の精神」を発表する（注18）。ここでは前年の講演をさらに一歩進め、死は魂が遊離したものであるから、鎮魂術を施して甦りをはかり、其の期間が仮死の期間であり、殯の期間でもある。そのような鎮魂術を施す遊部というのがいたという説を唱える。宮中鎮魂儀礼が鎮魂の芸能に、さらに殯が鎮魂であると鎮魂の領域は広がる。この遊部については昭和12年の「和歌の発生と諸芸術との関係」（注19）で詳しく説明され、「アソビ」がさらに踊りと舞になることが提示される。この後も鎮魂のあそびを基盤に置いた芸能論が展開される。「芸能史六講」（注20）は昭和16年国学院の学外講座として行った3日間の記録を昭和19年に出版したもので、芸能史というよりは日本における芸能の原理を述べたものといえる。やはり神あそび論をもととしているが、田遊びは田において行った鎮魂であるとしている。神あそび・田あそびと「アソビ」を芸能の中心においてのことであろう。

ここまで折口の鎮魂論をたどって来たが宮中鎮魂祭以外に鎮魂の儀礼を広げて解釈した場合、鎮魂が荒れた魂を鎮めるのではなく、魂を振り立たせるほうに重点がおかれている。神遊び・神楽・殯の鎮魂のいずれも復活もしくは甦りをもたらすものととらえている。戦後神道の靈魂観を論じたものに「神道概論」と「神道の靈魂信仰」がある。いずれも昭和21年から22年にかけて

ての大学の講義録をノートとして刊行したもので、旧『全集 ノート編 追捕第一巻』（注21）としてある。鎮魂はたまふりであるという意見が前面にでてきている。また魂には荒魂・和魂があり、荒魂は鎮定する必要があった。ただこれは魂鎮めではない。タマシズメはあくまでも遊離魂を身体に固着させることで魂をフルこと、即ち「くっつけること」であるとする見解は変わっていない。また「むすびの神」という観念が入ってくる。「鎮魂術とむすびとは後世関係が希薄になっているが、もとは鎮魂術の中にすべて入っていたものである。」とある。昭和24年4月柳田国男・折口信夫・石田英一郎の3者で「日本人の神と靈魂観念そのほか」という有名な鼎談を催している。（注22）そこで折口は鎮魂の技術者を鎮呪者という言葉で表し「人としての鎮呪者がムスビで、これが起源として想定したのが産霊神だ」というに至っている、というように折口の鎮魂はタマフリでありムスビの神に根ざしたものと見える。したがって悪霊や怨霊を鎮めるといふ観念はなかったといえよう。

再び鎮魂の語に限って述べると、宮中鎮魂から殯の鎮魂に、殯の鎮魂から芸能の鎮魂に論は展開する。宮中鎮魂の検証は古代文献の史的記述を追っていく。鎮魂の語はそれをタマフリともタマシズメと読もうとも史的記述の中にあるのだが、殯の鎮魂になると「令集解」の「遊部」に関する記事の「凶癘魂を鎮むる」の語のみによってしまう。これがはたして宮中鎮魂祭の鎮魂と同義語であるかは論が分かれる。芸能の鎮魂に至るとこの「アソビ」の語を敷衍化して「神遊び」「田遊び」に展開していく。折口は「芸能史は普通の歴史」ではなく、「無意識の目的」によって演じられているから「時代区分を追う」わけにはいかないとして述べている（注23）。神あそび・田あそびさらに展開して神楽・田楽となるとするが、これが鎮魂であるか否かの時代時代の記述は示されていない。したがってこのことについては検証不能とするか、そのまま肯定するかしかなないのである。折口はマレビトの観念と鎮魂の儀礼的意味とで芸能史を構成するが、厳密化すると鎮魂の語義の飛躍は否めないであろう。

3、柳田国男の鎮魂と御霊

柳田国男について述べよう。柳田国男が鎮魂の語を使って鎮魂祭や大嘗祭に言及した著述は折口に比して極端に少ない。「神道私見」（注24）で大正天皇の大嘗祭を例に全国神社の祭式が皇室祭祀に範をとっていることの説明で鎮魂祭の語はあるが詳しい説明はない。『木思石語』に納められている論文で大正11年（1922）に発表された『「うつほ」と水の神』の「鎮魂の祭」という項（注25）の中で鎮魂祭に用いられる魂筥のことを論じている。宮中鎮魂祭についてはこの二点のみである。これは柳田国男と天皇制で論じられているように柳田は大正天皇の大嘗祭に供奉していて、天皇には絶対的な忠誠と親愛観を抱いている。天皇祭祀については恐れ多い気持ちから言及はしなかった（注26）。したがって大嘗祭についての言及も少ないが、大正13年（1924）から昭和5年（1930）まで朝日新聞の論説委員を引き受け、昭和3年（1928）11月の昭和天皇大嘗祭の記事を担当している。大嘗祭にたいする個人的な思いを書いたため大幅な書き直しを命じられたことは有名な話で、『定本柳田国男集 別巻2』には柳田の原文と書き直され

た文の両方が収められている（注27）。柳田は両方の文を保管していた、という具合に大嘗祭に対する思い入れは強かったが、考究の方向は天皇霊のいかんよりも収穫祭としての新嘗祭・大嘗祭に向かった。その論は昭和28年に発表された「稲の産屋」にまとめられ『海上の道』に収められている（注28）。

また鎮魂論を考えるにはもう一つの課題、御霊信仰の論考に目を向けよう。柳田が御霊のことを書き出すのは大正3年の「毛坊主考」の「実盛塚」からで、実盛送りという虫送りは「虫の害を御霊の所為とする」ことから始まった行事であると説明する（注29）。昭和2年「雷神信仰の変遷」（注30）では京都の御霊社・北野天神社の御霊信仰に触れ、同じく昭和2年「目ひとつ五郎考」（注31）で鎌倉権五郎景政の御霊について、昭和6年には「大人彌五郎」（注32）で御霊としての彌五郎人形を論じている。京都の御霊社は天皇霊が含まれるが、他は民間に伝わる御霊を扱っている。それらの御霊について実盛にはく送る・供養する、権五郎にはく御霊の祟りを鎮める、彌五郎にはく慰撫し送却する、という表現をとっている。柳田は御霊については「魂を鎮める・鎮魂する」の語は使用していない。また盆に来る霊や盆踊りについては折口も柳田も盆に来る霊は正月に来る霊と同じであり、盆も正月もめでたい行事であることから「魂を鎮める・鎮魂する」ということは言っていない。（注33）

以上のように柳田国男は鎮魂祭もしくは鎮魂についてはほとんど語っていない。柳田が大正年間から昭和初期に民間聖の活躍やその聖達の行ったであろう御霊鎮めについては関心が高かった。しかしそれを鎮魂という語では説明していない。また折口が敷衍化して説明した殯についてもあまり語っていない、むしろ喪の忌み・喪の穢れに重きをおいて喪屋すなわち殯については忌みの期間ととらえて解釈している（注34）。折口のようにこの喪の期間を蘇生の期間そのために鎮魂する期間とは考えなかった。芸能については明治44年の「踊りの今と昔」で「疫癘の鎮静策」「邪神を祭却する方法」というような難解な表現をしているが、鎮花祭のヤスライ花ヤの囃しにく鎮の義、であるかどうかはわからないとしている（注35）。その後芸能に関しての論は少なく、折口のように鎮魂をもって芸能の発生とする考えはなかった。

4、築土鈴寛・堀一郎・五来重

折口・柳田の以降の研究をしてみよう。折口信夫の授業を受けて、仏教文学の研究の道に入った築土鈴寛は『中世芸文の研究』『宗教芸文の研究』と独自の研究を進める。著作集第五巻の月報に桜井徳太郎が「怨霊の民俗学」（注36）と題して築土鈴寛を紹介しているが、築土鈴寛は師の折口以上に鎮魂・怨霊ということを前面に出して論を展開した。彼自身が天台宗の僧侶であり、仏教に軸足を乗せた論考なので、神道家より死ということ念頭に置いた論の運びになっている。特に昭和13年から16年にかけての論考は折口の影響が強い。「謡曲に現れた怨霊思想」「鎮魂と仏教」「浄土教と生活・芸能」「中世芸能とくに平家語りをめぐって」（注37）等があげられるが、折口が「芸能史六講」の講義をまとめる直前くらいの論考である。すでに折口から腹案は語られていたのかもしれない。少し長くなるが、タマフリ・鎮魂に関して次のようにいっ

ている。

たまふりの信仰儀式から芸能の発生を折口信夫博士は夙くより説いておられるが、其の言葉の意味内容には変遷があって、元來死の觀念がないものだったが、漸時死の觀念を含ませてきたのは事実であったと思う。死の觀念によって肉体死は考えたにしても、生きている靈魂の確信は絶えず相續されたのであって、いずれは転生し再誕したのである。何れにしろ生死は哲学的にいはずとも、一つの面で生死一如の哲學觀は生死の生活觀の抽象であると見られる。(略)鎮魂の儀式が、あるいはこれを内容とし、それに中心意義をおいてみると見られる諸行事が、季節の生死、冬と春の行交ひにそれを感じ、季節に併行して営まれる生産の反面に、一方死の印象を深くしている(注38)。

この文は「生のためには一度死がある」「復活儀式」・「仮死仮眠の状態がある」というような文言に続く。簡単に言うと鎮魂儀禮を擬死再生儀禮と解釈し、さらに生死一如という哲学にまでもっていくということをしている。ただ続く箇所で鎮魂の踊りには「邪靈や怨靈の払攘というような呪術的な意味を含んでいる」という矛盾もしくは多義的な考えを示している。このように筑土鈴寛は折口の考えを宗教的思想的に深めたことで評価できるが、仏典を含む文献中心であったため芸能研究等では実証性に欠けることはあった。残念ながら昭和22年46歳の若さで亡くなっている。

堀一郎は柳田民俗学をアカデミックな宗教学の枠でとらえようとした。柳田初期の関心事であった聖や御靈の問題を史料で裏付けながら、『我が国民間信仰史の研究(一)(二)』という大冊にまとめた。『我が国民間信仰史の研究(二)』の内容は「第一部ヒジリと俗聖、その発生及び変化」「第二部山岳仏教の展開と修験者山臥の遊行的機能及び形態」「第三部我国浄土教の発達と民間念仏の形態と機能」「第四部近世特殊民漂泊民の呪術宗教的機能」で結論部は「民間信仰に於ける人神の觀念と宗教的遊行者の原初的性格と機能」でその中に「御靈信仰と死靈崇拜」が含まれている。全766ページで聖・修験・巫女等の民間宗教者のことのほとんどが含まれている。第三部の八編には「民間信仰に於ける鎮送呪術と民間念仏の機能」があり、念仏行者を「験者の一種であり、亡靈鎮送の呪術者」としている。鎮送とは堀一郎の造語であるが第八編の冒頭に「鎮送呪術の語義」として「熟さざる用語」であるとしながら「精靈・特に人間の死靈が生者の生活に脅威を与えようとするのを阻止するため、これを鎮遏し、送還する呪術の謂いである。」と定義している(注39)。鎮遏(ちんあつ)は鎮めとどめるの意である。堀一郎のこの本で踊り念仏・念仏踊りは多く取り上げられ御靈鎮祭・亡靈調伏の語で説明されている。(注40)鎮はしずめるというより、調伏する・押えつけるとの意味である。折口の鎮魂はタマフリという復活性が強いのに対し、堀の鎮送は対抗呪術的な概念であり、魂ではなく靈に行く儀禮であり、儀禮の方向も抗して押えるということであることから、折口のいう鎮魂タマフリとは別の儀禮と考えたほうがよいであろう。

最後に五來重に触れておこう。五來重は堀一郎とほとんど同世代であるが、民俗学の中で閑視されてきた仏教民俗の分野に目を向け大系化した。多くの著作があるが、最後の著作で未完で

あるといわれるが『葬と供養』が氏の考えの全体を表している。これを読むと鎮魂がキーワードになって日本人の霊魂観が形成されたという五来重の主張がよく読み取れる。この著作の作成経緯や批判はのちに出版された『五来重著作集11・12』（『葬と供養』は大冊なため著作集では2冊に分けて刊行された。）で赤田光男が解説に書いている（注41）。『葬と供養』は『東方界』という東方出版の出版宣伝月刊誌に昭和53年から62年の10年間にわたって連載されたもので、平成4年1092ページの一冊本として出版された（注42）。その鎮魂論関連部分を書き出すと「Ⅰ葬法論—凶癘魂と鎮魂」この細目は「一、はじめに 二、古代の殯 三、自然葬法と鎮魂 四、殯の種類と構造—殯の残存形態」である。以下「Ⅱ装具論—その宗教的観念」この段は幡・死花・お棺・六文銭というような葬式の道具が説明されている。「Ⅲ葬儀論1 臨終儀礼」「Ⅳ葬儀論2 殯歛儀礼」殯歛（ひんかん）儀礼とは通夜から入棺までの儀礼である。赤田の説明によるとこのあと「葬後供養論」「墳墓論」「祖先崇拜論」が続く予定であったとしている。このような壮大な葬送鎮魂論は冒頭の「一はじめに」「1、葬と仏教」「2、凶癘魂とモガリ」の中で示されたように伴信友・折口の遊び部論と凶癘魂論が入り口になっている。五来重は学位論文として民間念仏の研究からはじめ「民俗的念仏の系譜」「融通念仏・大念仏および六斎念仏」「念仏芸能の成立とその諸類型」と矢継ぎ早に諸論文を提示し、「遊部考」「踊り念仏から念仏踊り」を経て『踊り念仏』に至る（注43）。一方鎮魂については1975年『命と鎮魂』にある「怨霊と鎮魂」（注44）が始めであろうか。「遊部考」と結びついて葬礼鎮魂論に発展していく。論としては遊部の存在から殯の鎮魂へ、また芸能の鎮魂へと折口のとった鎮魂の敷衍化にのっとっているが、殯については折口の蘇生説に反対し、封鎖説をとっている。死者の魂を凶癘魂すなわち恐ろしいものとして忌避することから殯が成立するとする説である。鎮魂を鎮めすなわち押えつけるの意にとった論である。また殯宮廃止にともない遊び部が祖霊のための鎮魂神楽を行なうようになり、鎮魂芸能である踊り念仏・念仏踊りにつながっていくというのが大筋である。この過程の実証が少ないと見られるが、赤田光男が述べているように死者霊を凶癘魂としてのみ見るのはどうかという意見もある。

5、小結

さてここまで述べてきたので少しまとめて見よう。前号の「鎮魂」語の近代」で鎮魂という語が使われたり使われなかったりするのには政治や社会情勢にということ述べた。今回さらに研究史を眺めてみると鎮魂という言葉の語義がいくつかあって、時には誤用されているまたは意味が異なるのに同じ語として使用している経緯がありのではないかと思うようになった。

まず宮中鎮魂と死者鎮魂と芸能鎮魂（鎮魂芸能）の三つに分ける必要がある。宮中鎮魂とは毎年の新嘗祭に先立って天皇・中宮・東宮に行われる鎮魂祭と新嘗の後の12月に行われる斎戸祭の鎮魂祭で行われる鎮魂の儀礼とそれをささえる鎮魂の観念である。

死者鎮魂は現在、死者一般の葬儀およびそれをささえる観念にまで拡大されて使用されているが、殯鎮魂・御霊鎮魂・一般死者儀礼（鎮魂）に分ける必要があろう。

殯鎮魂は遊部が行った天皇の殯の鎮魂であるが、折口信夫が「鎮凶癘魂」を略して「鎮魂」としたのもで宮中鎮魂と同義に考えることができるのかという疑問が呈される。また凶癘魂とはなにかも折口信夫・五来重の間では解釈が異なる。殯を宮中鎮魂祭と同列に論じることができるのかが問題である。

御霊・怨霊の鎮魂に関しては、まず御霊・怨霊に鎮魂の語が、その時代に使用されたのが問題になる。史料の中からは「御霊を鎮魂する。怨霊を鎮魂する」の言葉はでてこない。「御霊を鎮める。慰撫する」は出てくる。このことは前号で少し触れている（注45）。平安時代から中世にかけての御霊鎮めに鎮魂の語を使用するのは1970年以降の言説で急に増えたものと考えられる。五来重の「怨霊と鎮魂」も1975年である。御霊信仰は八坂祇園社のように御霊はかならずしも人神ではなく、疫神送りととも重なる部分もある。御霊に対して堀一郎は鎮送という造語で説明している。さらに時代が下がると平家物語のように戦死者の霊を鎮めるようになる。これも鎮魂といったかは疑問である。平家物語や軍記物語を鎮魂の文学といたり、能を鎮魂の劇といたりするのも1970年以降急に増えている。死者の鎮魂を考える場合でも古代の殯の鎮魂と平安から中世にかけての御霊鎮めは一線を画す必要がある（注46）。近代においても明治時代には戦死者に対して鎮魂の語が使われるが、靖国神社の問題もあり長い間戦死者に鎮魂の語を使用することが控えられ、1970年ころから復活する。とともに昨今では戦死者・横死者に限定して使うのではなく死者を悼む感情を鎮魂といたりする。鎮魂の意味が変わってきた。以上のように死者への鎮魂の解釈は何段階も設定できて、時代によって変わってきている。

次に芸能の鎮魂または鎮魂芸能という概念がある。天岩戸の天宇売命の鎮魂の舞を神楽の始めとすることからきているが、神楽は鎮魂なのか、またそれ以降の芸能を神遊びとして一括できるのかは疑問である。折口では鎮魂の敷衍化の最後にできた概念で、筑土鈴寛はさらに哲学的ともいえる解釈を提示しているが、鎮魂かどうかは推定の域をでていない。

最後に宮中鎮魂に話しは戻るが、この概念の混乱のもとには鎮魂そのものにタマフリとタマシズメの二つの読みが記されていることに起因する。常識的には奮い立たせると静めるは相反する行為である。折口は統一的に理解しようとしたが、鎮魂祭そのものの成立時点で三つくらいの儀礼もしくは観念の複合であるとする見解が強い（注47）。このことを念頭に置くと、鎮魂という語義が混乱してきた経緯がわかる。そのように考えると鎮魂という語ですべてを説明するのは危険である。

注

（注1）飯田勇「〈鎮魂〉・〈天皇霊〉を考える―「鎮御魂齋戸祭」の祝詞の方法として―」この部分は飯田氏の説に負っている。

（注2）森田康之助『伴信友の思想』参照

（注3）伴信友の鎮魂論については津城寛文・渡辺勝義・皆川隆一がそれぞれ論じている。津城寛文は師本居宣長の天岩屋戸起源説を超えたことを評価している。渡辺勝義は『令義解』

『令集解』を繰り返しているだけと批判している。皆川隆一は伴信友の説が現在まで続いていることを述べ、昭和12年の『神道大辞典』の文を示している。参考に現在の大方の解釈として『神道大辞典』の文を引用する。

「<タマシズメノマツリ> 生者の遊離魂を招いて身体の中府に鎮める為の神事。この神事は二つの動作が関連した一の儀礼になって表れたので、一旦出離し、又はせんとした魂を再び本体に復帰せしめんとする動作をミタマシズメと称し、静止または沈滞せんとする状態にある魂を振付活動せしめんとする作用をミタマフリといい、この作用を統一した儀礼が所謂鎮魂の儀礼である。」

しかしこの説明では矛盾した儀礼が統一されて行われているという感は否めない。

(注4) 『世継草』の間引き禁止を絵馬にしたのが、柳田國男が幼少のころ茨城県布川でみた子殺しの絵馬で『世継草』とともに茨城南部に広まっている。『世継草』の考えは正しい男女の交わりにおいて子供を作りしっかりと育てることが親の役目であると説いたものである。なお平田篤胤を敬愛し門下に入ることを望んだが果たせず、最後は暗殺されてしまう。その経緯は芳賀登1985に詳しい。

(注5) 津城寛文「伴信友と鈴木重胤の鎮魂説」『折口信夫の鎮魂論』

小川直之「折口信夫の靈魂論覚書」

前田勉「鈴木重胤の鎮魂論」

(注6) 岩波文庫版『古事記伝(四)』p56

(注7) 岩波文庫版『靈の真柱』p172

(注8) 子安宣邦は『宣長と篤胤の世界』でこのことを指摘している。

(注9) 筆者の<鎮魂>語疑義考その1「鎮魂」語の近代>25号所載の中で神葬祭の考えに鎮魂の考えはなく遷霊であるとしたが、死後の世界を魂の鎮まる世界という感覚があり、神葬を鎮魂祭と理解したとも考えられる。

(注10) 小松和彦「支配者と御霊信仰」『悪霊論』宮城公子「幕末国学の幽冥観と御霊信仰」『幕末期の思想と習俗』

(注11) 坂本要「『鎮魂』語の近代」『比較民俗研究』No25

(注12) 折口信夫の鎮魂論については津城寛文が体系的に述べ、各論では渡辺勝義の批判がある。

折口の全体の枠組みからの批判は諏訪春雄の著『折口信夫を読み直す』があり、鎮魂論についても「第五章鎮魂」で詳しく述べられている。天皇霊についての近代思想史からの位置づけは安藤礼二の著がある。大嘗祭についての言説の変化は多く人が述べられているところでコンパクトには『折口信夫事典』の各項目、及び茂木栄の論参照

(注13) 諏訪春雄『折口信夫を読み直す』p126~128

折口信夫「琉球の宗教」大正12年(1923)旧『全集2』p47「(スジ)は靈魂或は精霊と言う位の處から出て居るのであろう。(略)柳田先生は此すじをもって、我国の古語イツと一つのものとして、マナ信仰の一様式と見て居られた。」(傍線用語はカタカナにした。)

- (注14) 折口信夫「小栗外伝」旧『全集2』 p358~366
- (注15) 折口信夫「ほうとする話」旧『全集2』 p424「翁の発生」旧『全集2』 p388「村々の祭り」旧『全集2』 p457「ほうとする話」と「村々の祭り」は<祭りの発生1・2>という連続著作である。
- (注16) 折口信夫「大嘗祭の本義」の著作・発表経過については茂木栄1989参照。それにより信濃教育会での本編発表を昭和3年6月とした。旧『全集3』 p143~173
- (注17) 折口信夫「神道と民俗学」新『全集 別巻1』1999折口信夫全集刊行会編 中央公論社
- (注18) 折口信夫「上代葬儀の精神」旧『全集20』
- (注19) 折口信夫「和歌の発生と諸芸術との関係」旧『全集17』
- (注20) 折口信夫「芸能史六講」旧『全集18』
- (注21) 旧『折口信夫全集 ノート編追捕第一巻』1987折口博士記念古代研究所編 中央公論社
- (注22) 「日本人の神と靈魂観念そのほか」『民俗学について 第二柳田国男対談集』1965筑摩書房 p23
- (注23) 折口信夫「芸能史六講」第一講第二講 旧『全集18』 p337・p355
- (注24) 柳田国男「神道私見」『定本集10』 p435
- (注25) 柳田国男「うつぼと水の神」『定本集9』 p459~460
- (注26) 後藤総一郎『柳田国男論序説』また『柳田国男伝』第九章朝日新聞社時代二節四「皇室」に詳しい。
- (注27) 朝日新聞論説昭和3年11月6日・11月14日『定本柳田国男集別巻2』筑摩書房
- (注28) 柳田国男「稲の産屋」『定本集1』
- (注29) 柳田国男「毛坊主考」『定本集9』 p354
- (注30) 柳田国男「妹の力」『定本集9』 p70~76
- (注31) 柳田国男「一目小僧その他」『定本集5』 p172
- (注32) 柳田国男「妖怪談義」『定本集4』 p404
- (注33) ただ折り口は盆に来る霊は良い霊も悪い霊もあるので「盆踊りには魂祭りと道行きの踊りと無縁の亡霊・怨霊・聖霊（しょうりょう）等の悪霊を追い払う踊りの三つ意味がある」としている。折口信夫「盆踊りの話」旧『全集2』 p263~263
- (注34) 柳田国男「先祖の話」『定本10』 p65~65
- (注35) 柳田国男「踊りの今と昔」『定本7』 p428・435・436
- (注36) 桜井徳太郎「怨霊の民俗学」『筑土鈴寛著作集5月報』No5
- (注37) いずれも『筑土鈴寛著作集4 中世・宗教芸文の研究二』に収められている。
- (注38) 「芸能と生命様式」『筑土鈴寛著作集4 中世・宗教芸文の研究二』 p326
- (注39) 堀一郎『我が国民間信仰史の研究（二）』 p397
- (注40) 堀一郎『我が国民間信仰史の研究（二）』 p753
- (注41) 赤田光男「五来重の葬法論と葬具論」『五来重著作集11』「五来重の葬儀論」『五来重著作

集12】

(注42) 五来重『葬と供養』東方出版

(注43) 学位論文は「日本仏教民俗学論巧」として『著作集1』「第二部 念仏芸能の研究」に収められている。「民俗的念仏の系譜」「融通念仏・大念仏および六斎念仏」「念仏芸能の成立とその諸類型」は参考文献にある。

(注44) 「怨霊と鎮魂」『命と鎮魂』朝日カルチャーセンターの講座として講演したもの。後に『日本人の死生観』角川選書に入る。

(注45) さらにこれを遡って現在刊行されている中世の古記録・典籍の一応の索引（東大史料編纂室所蔵索引等）を引いても宮中鎮魂祭以外での「鎮魂」の用例は見つかっていない。（「——を鎮める。——を鎮撫す。」はある。）

(注46) 日本史学のほうでは黒田俊夫の「鎮魂の系譜—国家と宗教をめぐる点描—」が基礎になっている。御霊信仰は支配者によって生み出されたもので古代から近代まで時代によって変化するという説。

(注47) 松前建「折口学の再検討」p197

参考文献

赤田光男2009「五来重の葬法論と葬具論」『五来重著作集11葬と供養（上）』法蔵館

2009「五来重の葬儀論」『五来重著作集12葬と供養（下）』法蔵館

安藤礼二2004『神々の闘争 折口信夫論』講談社

飯田勇 1992「〈鎮魂〉・〈天皇霊〉を考える—「鎮御魂斎戸祭」の祝詞の方法として—」『思想』No820 1992年10月号 岩波書店

小川直之2007「折口信夫の靈魂論覚書」『明治聖徳記念学会紀要』復刊44号明治聖徳記念学会

黒田俊夫1982「鎮魂の系譜—国家と宗教をめぐる点描—」『歴史学研究』No500→『著作集3』法蔵館

後藤絵一郎1972『柳田国男論序説』伝統と現代社

小松和彦1997「支配者と御霊信仰」『悪霊論』筑摩書房

子安宣邦1977『宣長と篤胤の世界』中央公論社

五来重 1992『葬と供養』東方出版

1952「日本仏教民俗学論巧」『著作集1』法蔵館

1952「民俗的念仏の系譜」『印度学仏教学研究5-2』印度学仏教学会

1952「融通念仏・大念仏および六斎念仏」『大谷大学研究年報第10集』大谷学会

1961「念仏芸能の成立とその諸類型」『大谷大学研究年報第14集』大谷学会

1963「遊部考」『仏教学研究第1集』仏教文学研究会→『著作集3』法蔵館

1966「踊り念仏から念仏踊り」『国語と国文学』昭和41年10月

1988『踊り念仏』平凡社

- 1975 「怨霊と鎮魂」『命と鎮魂』河出書房新社
- 1994 『日本人の死生観』角川選書
- 坂本要 2011 「『鎮魂』語の近代—「鎮魂」語疑義考その1」『比較民俗研究』No25比較民俗研究会
- 桜井徳太郎 1978 「怨霊の民俗学」『筑土鈴寛著作集月報』No.5 せりか書房
- 諏訪春雄 1994 『折口信夫を読み直す』講談社現代新書
- 筑土鈴寛 1977 『筑土鈴寛著作集4 中世・宗教芸文の研究二』せりか書房
- 津城寛文 1990 『折口信夫の鎮魂論』春秋社
- 2005 「神道起源論としての折口鎮魂説」『折口信夫・釈超空—その人と学問—』おうふう
- 西村亨編 1998 『折口信夫辞典』大修館書店
- 堀一郎 1953 『我が国民間信仰史の研究（二）』東京創元新社
- 前田勉 2002 「鈴木重胤の鎮魂論」『近世神道と国学』ぺりかん社
- 松前建「折口学の再検討—マレビト論と常世論をめぐる—」『国学院雑誌』94頁 2003年11月
國學院大學
- 皆川隆一 1988 「たまふり・たましずめ」西村亨編『折口信夫辞典』大修館書店
- 宮城公子 2004 「幕末国学の幽冥観と御霊信仰」『幕末期の思想と習俗』ぺりかん社
- 茂木栄 1989 「折口信夫の大嘗祭観—天皇たる由縁—」『国学院雑誌』No91-7国学院大学
- 森田康之助 1979 『伴信友の思想』ぺりかん社
- 山下紘一郎 1988 「朝日新聞社時代」柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房
- 渡辺勝義 1994 『鎮魂祭の研究』名著出版
- 折口信夫・柳田国男については多いので註参照